

魚類防疫に関する技術指導と研究

(魚介類安全対策事業)

後藤悦郎・堀 玲子・岡本 満・清川智之・福井克也
安木 茂・石田健次・三浦常廣・山根恭道・開内 洋

1. 研究の目的

海面及び内水面の魚病被害軽減と魚病のまん延防止のため、魚病検査や水産用医薬品の適正使用の指導及び、養魚指導・相談を行なう。

2. 研究方法

種苗生産場、中間育成場、養殖場を巡回し、疾病の対処法や飼育方法の指導、助言を行うとともに、疾病発生時には迅速に現地調査や魚病検査を行った。また、天然水域で大量へい死が起こった場合も現地調査や魚病検査を行った。魚病の検査方法は主に外観及び解剖による肉眼観察、検鏡観察と細菌分離を行なった。細菌が分離された場合は、薬剤感受性検査（ディスク法）を実施し、治療・対策方法並びに水産用医薬品の適正使用について指導を行なった。また、KHV病やVNN症等についてはPCR検査を実施して原因ウイルスの存在を確認した。

なお、アユの冷水病に関しては「アユ冷水病対策事業」に別途記述した。

3. 研究結果

今年度の魚病診断件数は、隠岐地区海面9件、出雲地区海面6件、石見地区5件、内水面35件（うちKHV検査24件）であった。主要なものとしては以下のとおりである。

隠岐島前海域で7月にアワビの斃死情報があり調査を行った。その結果、メガイ、クロアワビ共にサイズに関わりなく斃死しており、斃死率（88%）も高く、斃死は春以降に発生していたことが推察された。しかしながら、斃死原因は疾病、環境変化、大雨、有害プランクトン等多岐にわたり検討したが特定することができなかった。

アカアマダイ種苗生産に関連して天然海域の

親魚のVNN原因ウイルス保菌状況を4月から8月にかけて検査した。その結果、雄は36尾中3尾、雌は33尾中5尾が陽性となり、11.6%の陽性率であった。17年度の10月に行った検査でも14.7%が陽性であり、VNN原因ウイルスが天然海域のアカアマダイ親魚に広く存在していることが再確認された。

県内の底びき網漁業で漁獲されたキアンコウの頭骨内部や背骨周辺を中心として微胞子虫と思われるシスト塊がほぼ100%の高率で確認された。個々のシストの大きさは0.5～1.5mmであり、1尾あたりの寄生量はかなり個体差があった。キアンコウの脳神経系に寄生する微胞子虫の *Spraguea americana* であると思われた。症例が近年急増しており、今後食品衛生上問題になる可能性が高い。

今年度を実施したKHV検査は、天然水域で8件（24尾）、個人池・公共水域で5件（31尾）、定期検査（養鯉業者5社、高津川、江川、神戸川、宍道湖）11件（58尾）の合計24件113尾の検査を行い、うち6件で陽性が確認された。

今年度は、津和野町（掘割および津和野川）で220尾、松江市西浜佐陀町（西潟ノ内）で283尾と大量のへい死があったが、平成17年の宍道湖でのへい死数（11,944尾）に比べ比較的少なかった。

民間のアユの種苗生産施設では例年仔稚魚期の大量へい死により生産不調となっていたため、注水方法やワムシ培養方法等の改善指導を行った。今年度の種苗生産では大量へい死が起こることなく順調に推移した。

海面（出雲地区、石見地区、隠岐地区）及び内水面の疾病発生状況及び診断状況の詳細については付表に記述した。